



TITLE:

<批評・紹介>呉樹平著「秦漢文獻研究」

AUTHOR(S):

小林, 春樹

CITATION:

小林, 春樹. <批評・紹介>呉樹平著「秦漢文獻研究」. 東洋史研究 1991, 50(1): 170-178

ISSUE DATE:

1991-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154343>

RIGHT:

の一層の健康と活動の發展を祈って擲筆する。

一九八九年九月 京都 同朋舎出版

B5判 七〇八頁 四九四四〇圓

吳樹平著

秦漢文獻研究

小林 春樹

秦漢時代に關係する史料のうち、『史記』や、近年發見された雲夢睡虎地竹簡などの諸文獻に對しては既に様々な研究が行われている。とりわけ前者については、『史記』學もしくは「司馬遷學」とも稱するべき新たな學問領域を形成し得るほどに膨大な「量」の研究が發表されており、そのことは周知の事實であらう。しかしそれとは對照的に、他の著作、例えば范曄のそれに代表される種々の『後漢書』、あるいはその祖本の一つとされたと言われる『東觀漢記』などについては極めて僅かな研究しか發表されておらず、それが中國古代史學史の一つの缺陷となっていたことも否定し得ない事實であった。

ここに書評を試みる吳樹平氏の『秦漢文獻研究』は、秦漢時代關係の文獻研究に存在するそのような間隙を埋める業績として貴重な著作であると思われる。

一

本書の構成を「目錄」に従って紹介すると以下のようになる。

雲夢秦簡所反映的秦代社會階級狀況

從竹簡本《秦律》看秦律律篇的歷史源流

竹簡本《秦律》的法律觀及其前後的因革

《東觀漢記》の撰修經過及作者事略

《東觀漢記》の書名

《東觀漢記》の材料來源

《東觀漢記》中の本紀、表、列傳、載記和序

蔡邕撰修的《東觀漢記》十志

《東觀漢記》の流傳

竄入《東觀漢記》の偽文

姚之駟輯本《東觀漢記》

四庫館臣輯本《東觀漢記》

四庫館臣輯本《東觀漢記》與《北堂書鈔》

《東觀漢記》の缺陷和諸家後漢書

《風俗通義》雜考

《汜勝之書》述略

侯瑾及《漢皇德傳》考

紀傳體史書中《列女傳》創始考

紀傳體史書中《孝子傳》創始末考

新本《史記》の二十四史の校勘

關於范曄謀反問題的探討

范曄《後漢書》の撰修年代

范曄《後漢書》の志

范曄《後漢書》の《紀傳例》

附錄

范曄《後漢書》與華嶠《後漢書》

范曄《後漢書》與《東觀漢記》

從臨沂漢墓竹簡《吳問》看孫武的進步思想

顧棟高《春秋大事表》略論

上記の目次からも知られるように、本書においては章別の構成法は採用されていない。しかし、最初の三編が雲夢睡虎地秦簡に関する論考、次の十一編が『東觀漢記』に関する論考、次の三編が『風俗通義』など、漢代に著された種々の著作に関する個別的論考、次の三編が史書の體裁を中心とした論考、次の六編が范曄の『後漢書』に関する論考、「附錄」として掲載された最後の二編が秦漢以外の時代を扱った文獻に関する論考、というように、各論考がその内容にもとづいていくつかのグループにわけて配列されており、その結果、全體が一つのまとまりを形成するような配慮がなされている。従って以下では、各々の論文の概略を逐次紹介するとともに、各グループの終わりとともに必要に応じて評者の所感を記すこととし、それを以て本書の書評にかえることにしたい。

二

雲夢睡虎地秦簡に関する最初の論文である「雲夢秦簡所反映的秦代社會階級狀況」では、秦が持っていた「封建國家」の性格やその法律運用の特色、およびウクライドとしての秦の奴隸制について考察がおこなわれる。すなわち「二」の前半においては、「田律」以下の律文を史料として、秦が「皇帝・皇族・官吏・地主が一體とな

って全國の大部分の土地を壟斷する『封建國家』であつたことが主張され、後半においては、秦による法律運用の實態が嚴酷且つ恣意的なものであつたという事實が、「語書」や「法律答問」などを史料として明かにされる。また(二)では、「法律答問」以下の秦律の記載にもとづいて次の二つの事實の確認、すなわち、(1)秦代は封建制の確立期ではあつたが、未だに奴隸制的ウクライドも残存していたこと、(2)その結果秦の支配階級は、封建制度によって新たに誕生した農民階級と、奴隸制度の殘滓として當時廣汎に存在していた奴隸階級の兩者からの抵抗を受けざるを得なかつたこと、の二點の確認が行われるとともに、(2)の事實が、秦帝國を短命に終わらせる要因となつた、という説が展開される。

次の「從竹簡本《秦律》看秦律律篇的歷史源流」では、先ず、秦の商鞅の六律が秦律の淵源をなすものであることが指摘され、續いて、その秦律が漢の律(特に蕭何の九章律)に與えた影響や、秦律とは異なつた九章律の獨自性などについて考察が加えられる。因みに著者によれば、蕭何の九章律には刑法的性格と行政法的性格とを區別しようとする傾向が現れており、それが、秦律には見られなかつた漢代の律の特色であるという。

雲夢睡虎地秦簡に關する最後の論考である「竹簡本《秦律》的法律觀及其前後的因革」の議論の要旨はおよそ以下の四點にまとめることができる。(1)竹簡本「秦律」の法律觀に強い影響を與えた商鞅の法律觀は、「法律で生産を強制することによって民生を安定させる一方において、刑罰の強化によって犯罪を防止することが結果的に民衆の幸福に通じる」と考えるものであり、同時に、「そのことが君主の地位を安定させ、その權力を強化することにもなる」と確

信するものであつた。(2)これに對して竹簡本「秦律」自體の法律觀は、主として法律による君主權強化を目指す、中央集權的志向の強いものであつた。(3)秦の始皇帝による全國統一は、商鞅以來の法家の法治主義がもたらした成果であるが、始皇帝自身の法治主義は民生への配慮を缺いた嚴酷一邊倒のものであつた。秦が統一後まもなく滅亡したのはそのためである。(4)秦の失政に學ぶことが多かつた漢の支配階級の法律觀の特色は、始皇帝による極端な法治主義を改め、これに德治主義を加味した點に求めることができる。以上である。

雲夢睡虎地秦簡をめぐる著者の考察は以上のように概括することができると思われるが、當該文獻については現在もなお、著者をはじめとする多くの研究者によって様々な角度から眞摯な検討が行われていること、および、(特に日本において顯著な傾向であるが)、雲夢睡虎地秦簡が示す諸事實を、先入觀にとらわれることなくあるがままに「了解すること」によって新たな古代史像を構築するため、の努力が續けられていることなどは周知の事實であらう。そのような現實に鑑みる時、評者のような門外漢が當該文獻をめぐる研究に對して何らかの論評を差し挟むことは躊躇されるのであるが、著者が、「雲夢秦簡所反映的秦代社會階級狀況」において、中國における從來の理解を踏襲(もしくは再確認)するかたちで秦帝國の性格を「封建國家」と規定されている點に關しては、かつて榊山明氏が、楊寬氏の『戰國史』に對する書評の中で行われた以下のような指摘、すなわち、「ある社會を封建制と規定するのであれば(中略)『地主』が(中略)自己の内に完結した經濟外強制のシステムをもつことによつて國家權力を分割する、文字通りの封建地主であ

る點こそが證明されるべき」であるという指摘が、そのまま著者の理解に對する批判としても妥當することを確認しておきたいと思う次第である。

三

『東觀漢記』的撰修經過及作者事略」から『東觀漢記』的缺陷和諸家後漢書」までの、『東觀漢記』に關する十一編の論文は合計一八七頁におよぶ量的豊富さにおいてだけでなく、そこで扱われている問題の多様性から見て、本書の中心を爲す部分と考えることができる。以下、各論考ごとにその概略を紹介し、そのうえで若干の私見を述べることにしたい。

『東觀漢記』的撰修經過及作者事略」は、『東觀漢記』の編纂過程を後漢の各皇帝の治世ごとに確認するとともに、それぞれの段階において同書の編纂にかかわった人々の名前とその略歴を紹介した有益な論考であるが、そこに示された要旨は次の三點にまとめることができる。(1)明帝時代における政治的・經濟的安定期に班固というすぐれた歴史家が出現したことが、『東觀漢記』の著作が始められるきっかけを作ったこと。(2)その班固と、劉珍および蔡邕とが、同書の成立に最も貢獻した人物であったこと。(3)三國時代に入っても隨時『東觀漢記』の増補が行われていたこと。以上である。

次の『東觀漢記』的書名」では當該書の名稱の變遷が考察されており、(1)後漢時代から三國時代まではそれが『漢記』とよばれていたこと、(2)南北朝時代頃から、荀悅の『漢記』との混同を避けるために、次第に『東觀漢記』の名稱が使われるようになったこと、(3)その名稱が定着したのは宋代以後であること、などが指摘されて

いる。

『東觀漢記』的材料來源」は、『東觀漢記』の主要な史料源を追求した論考であり、皇帝などの私的言動を記した「起居注」、同じくその公的言動を記した「注記(著記)」、あるいは蘭臺や東觀に保管されていた圖書や公文書のほか、「功狀」、すなわち臣下に命じて書かせたそれぞれの家の祖先に關する記錄、さらには私人の著作など、種々の記錄や著作が『東觀漢記』の史料として利用されたことが論じられている。

『東觀漢記』中的本紀、表、列傳、載記和序」の主題は、『東觀漢記』の本紀から序にいたるまでの各敘述類型の性格を明かにすることであるが、紙數の關係上ここでは以下の論點を紹介することにどめたい。(1)本紀について「更始本紀」がたてられていることから知られるように、正統論から離れて、自由且つ客觀的立場から敘述が行われている。しかし文章・内容ともに『史記』や『漢書』に比べると遜色が目立つ。(2)列傳について「初めて『列女傳』をたてた可能性がある。(3)載記について「本林・新市・下江・公孫述以外にも、正統論的觀點にもとづいて赤眉・隗囂などの傳記が載記に列せられていた蓋然性が高い。(4)序について「正しい意味における批評とはなっておらず、冗長な美辭麗句に墮している。以上である。

續く『蔡邕撰修的『東觀漢記』十志』では、先ず「(一)として、蔡邕が四十歳代半ばで『十志』(後漢、第十代の皇帝である桓帝の諱である「志」字を避けて「十意」とよばれることもある)を完成するまでの過程が彼の經歷に則して述べられ、「(二)ではその十志の具體的編名をめぐる、(1)蔡邕が編纂した十志とは、『律曆』・『禮樂』・『郊祀』・『天文』・『地理』・『車服(輿服)』・『朝會』の七編

に、未知の三編を加えたものであったこと、(2)ここである未知の三編とは、『漢書』の十志に含まれている「刑法」・「食貨」・「五行」・「溝洫」・「藝文」以外の編目であったこと、の二つの事實が明かにされる。また「三」では、逸文中に散見される蔡邕の「表志」なるものが、十志の序文に相當するものであったことが論じられ、その上で「四」においては、その表志と十志の逸文・合計四十一條が提示されるとともに、「朝會志」に關しては、それが蔡邕の獨創にもとづく編目であったことが指摘されている。

『東觀漢記』に關する論考の第六編目に相當する「《東觀漢記》的流傳」は同書の成立から散逸までの過程を概観した論文であり、そこでは、後漢末期にはその寫本が廣く流布し、且つ多くの人々に讀まれていた『東觀漢記』が、范曄の『後漢書』の成立以後、次第に等閑視されるようになったこと、および、元代には現在とほぼ同じ程度に散逸してしまつていたこと、の二點を中心とした考察が行われている。

一方、「竄入《東觀漢記》的僞文」以下「四庫館臣輯本《東觀漢記》與《北堂書鈔》」までの四編は、そのようにして散逸した後の『東觀漢記』（つまり同書の逸文）を主題とした論文であり、各々、次のような議論を展開している。

先ず「竄入《東觀漢記》的僞文」では、各種の注釋や類書に引用された『東觀漢記』の逸文には引用者による改變が加えられている場合が多いことを明かにし、次の「姚之駟輯本《東觀漢記》」では、姚氏輯本の缺點として、(1)遺漏が多いこと、(2)原本の構成を無視して逸文を配列していること、(3)考訂が不十分であること、(4)出典を記していないこと、の四點を指摘している。また「四庫館臣輯本

《東觀漢記》」は同輯本の長所と短所とを明かにした論考であつて、當該書の長所として、姚氏輯本が持つていた缺陷を大幅に改善している點を擧げる一方において、短所としては逸文の蒐集が未だ不十分であること、および、その配列に誤りや不適切な點があることなど、姚氏輯本に見られた問題點が依然として完全には拂拭されていないことを指摘している。なお、「四庫館臣輯本《東觀漢記》與《北堂書鈔》」は、四庫全書所收の『東觀漢記』の逸文のうち、『北堂書鈔』から採られたそれが、明代の陳禹謨が刻した『北堂書鈔』に據つたものであることなどを明らかにした論文である。

『東觀漢記』に關する最後の論考である「《東觀漢記》的缺陷和諸家後漢書」では多岐に涉る問題が論じられているが、その要旨は以下の三點にまとめることができよう。(1)『東觀漢記』には曲筆が加えられた記事や無用な史料が多いという缺點のほか、それが未完であるという問題點があつた。(2)『東觀漢記』を基本史料として、謝承以下の人々によつて種々の『後漢書』が書かれることになったのはそのためである。(3)謝承の『後漢書』をはじめとする所謂「諸家後漢書」が『東觀漢記』を基本史料としていることは事實であるが、それらには『東觀漢記』には存在しない、獨自の史料や項目が見出されることも忘れてはならない。以上である。

『東觀漢記校注』上下二巻という勞作の編者でもある吳樹平氏によつて著された、『東觀漢記』に關する上記十一編の論考が當該書に關する最初の本格的且つ総合的な研究であることは言を俟たない。また、著者の檢討によつて初めて説得力のある解答が與えられた『東觀漢記』をめぐる懸案——例えば、『東觀漢記』の「十志」とは具體的に何を指すのかという問題など——が數多く存在するこ

とも事實であり、その點から見ても、本書に收められた十一編の論考が貴重な業績であることは明らかであろう。

そのような著者の研究について批判するべき重要事項が存在しないことは當然のことであるので、ここでは、著者による詳細な「文献學的研究」が達成された結果、新たに生じた「史學史的課題」を具體的に確認し、それを以て上記の諸論文に對する批評にかえたいと思う。その新たな課題とは、評者を含む中國史學史の研究者全體に與えられた課題であり、それは、「當該書に關する『史學史的、もしくは内面的研究』の達成」と約言することが可能なものである。すなわち、著者によつて緻密な文献學的研究が實現された現在、我々、中國史學史の研究者に與えられた新たな課題は以下の四點、つまり、(1)『東觀漢記』とその著者たちの史學思想に見出される特色を、それぞれの記事が書かれた時期ごとに分けて個別的に解明すること、(2)その結果を總合して當該書獨自の史學思想を明らかにすること、(3)さらにそれを、後漢初期に關臺において書かれた種種の記録や、魏晉南北朝時代の著作である「諸家後漢書」に見出される様々な史學思想と比較検討すること、(4)それらの作業を通じて、『東觀漢記』とその著者たちの史學思想を中國史學思想史の上に正しく位置づけること、の四點であるということを確認しておきたいと思うのである。

四

「風俗通義」は、上掲の『東觀漢記校注』に加えて『風俗通義校釋』という著書をも有する吳樹平氏が、漢代史に關する重要史料である『風俗通義』について、各種の輯本ごとにその文章の

脱漏や亂れを指摘してそれらを補足・訂正するとともに、當該書の版本の問題や、その著者・應劭の經歷などを明らかにされた論文である。

また『汜勝之書』述略』は、前漢の成帝時代の御史であつた汜勝之が著した農業書である『汜勝之書』の内容を紹介するとともに、同書が出現した必然性、もしくは必要性などを追求した一文である。

一方、「侯瑾及『漢皇德傳』考」は、袁宏の『後漢紀』と並んで重要な編年體の後漢史であつたものの、現在はそのほとんどが散逸してしまつた侯瑾の『漢皇德傳』に關する數少ない貴重な專論であつて、そこでは以下の諸事項が明らかにされている。(1)著者である侯瑾が後漢末期の敦煌に生きた、圖讖に詳しい文學者兼歴史家であつたこと。(2)『漢皇德傳』の主な史料もまた『東觀漢記』であつたこと。(3)地方の文化人に過ぎなかつた侯瑾が、そのように『東觀漢記』を參照し得たという事實によつて、同書が廣く一般に流布していたことが間接的に知られること。以上である。

五

以上の各論考が特定の史料あるいは著作を扱つていたのに對して、「紀傳體史書中『列女傳』創始考」と「紀傳體史書中『孝子傳』創始始末考』では、「列女傳」と「孝子傳」という、紀傳體の「傳」における二つのジャンルの成立過程が考察されている。すなわち前者においては「列女傳」の成立について、「劉向の『列女傳』↓班昭の『女誡』↓『東觀漢記』の列女に關する傳記↓謝承の『後漢書』の列女に關する傳記↓范曄の『後漢書』の『列女傳』」

という系譜が、また後者においては「孝子傳」の成立について、〔劉向の「孝子圖傳」↓「東觀漢記」の孝子に關する傳記↓華嶠の「後漢書」の孝子に關する傳記↓范曄の「後漢書」の孝子に關する傳記↓沈約の「宋書」の「孝義傳」〕という系譜が想定されるとともに、それぞれの過程においても、やはり「東觀漢記」が重要な役割を果たしたことが論じられている。なお、「新本《史記》等」二十四史の校勘は所謂「標點本二十四史」の特色に關して、その長所などを列挙した一文である。

六

『後漢書』が後漢史に關する基本史料であること、および、現在『後漢書』と言へば、南朝の宋の范曄が著したそれに、西晉の司馬彪の『續漢書』の志類を併せたものを指すことは周知の事實であるが、本書の本編の最後には、その范曄の『後漢書』（以下「范書」と略稱する）の本紀と列傳、および、その存在や内容について様々な問題を含んだ、范書自體の志類を考察の対象とした六編の論考が掲載されている。

このうち最初の「關於范曄謀反問題的探討」では、范曄の謀反事件をめぐって、清の王鳴盛の『十七史商榷』に記されたような、「范曄には明確な叛意は無かった」とする一般の見解に對する反論が行われる一方において、范曄の謀反の歴史的意義に就いては、それが結局支配階級内部の權力争いに過ぎなかった、という評價が下されている。

また「范曄《後漢書》的撰修年代」では、その題名が明示しているとおり范書の著述が行われた年代の考證が試みられており、同書

が通説のように宋の文帝の元嘉元年（四二四年）ではなく、元嘉九年（四三二年）以後、數年間をかけて書かれたものであるという見解が提示されている。

一方「范曄《後漢書》的志」は、范書自體の志類に就いて次の諸點を明らかにした論考である。(1)范書を述作するための助手として謝儼という人物が存在していたこと。(2)その謝儼の手助けを得て、范曄自身、「百官」・「禮樂」・「輿服」・「五行」・「天文」・「州郡」・「律曆」・「刑法」・「食貨」・「藝文」の十志を著せうとしていたこと。(3)「百官志」など、その一部は實際に書かれていたこと。(4)しかし「後漢書注補志序」の中で劉昭が述べているように、それらも梁の頃には散逸してしまい、范書自體の志類は「全闕」の状態になっていたこと。以上である。

次の「范曄《後漢書》的《紀傳例》」は范書の「紀傳例」について、さらには紀傳例一般について、讀者に様々な理解を提供してくれる有益な考察であつて、その要旨は以下の四點である。(1)「紀傳例」とは、「多所誅殺曰屠」（范書、光帝紀上、李賢注所引）や「據春秋、唯李萇、日食、地震書、餘悉備于志」（范書、安帝紀、李賢注所引）のように、本紀や列傳を書く場合の「凡例」のことである。(2)しかしそれは單なる凡例ではなく、歴史書の一言一句に深い意味を託すという所謂「春秋の筆法」、あるいは「微言大義」の思想を背景として設定されたものである。(3)王先謙などは、范書の紀傳例は未完成であつたと説いているがそれは誤りである。すなわち范書の紀傳例は完成されていたのであり、范書はそれに忠實に従つて書かれているのである。(4)范書のそのような紀傳例は、劉昭や劉知幾によって賞賛されるほどすぐれたものであつたが、それが本

文とは別に世に伝えられていたために現在までにその大部分が失われてしまった。

續く「范曄《後漢書》與華嶠《後漢書》」という一文では、現在では散逸してしまっているものの、古來名者の譽れが高い、西晉の華嶠の『後漢書』と范曄との關係が論じられており、(1)前者の體例・序文・論贊などが後者に強い影響を與えたこと、(2)ただし范曄は、華嶠の『後漢書』の史論の冗長な部分を省略、あるいは書き換えるなどして、それを充分に自分のものにしたうえで利用していること、の二點が明らかにされている。

范書に關する一連の考察の最後に掲載された論考は「范曄《後漢書》與《東觀漢記》」であるが、これは本書に收録されたすべての論考のうちでも出色の一文であると思われる。というのは、この論文では次のような表面的な考察、つまり「史論の上で范書に影響を與えた書物が華嶠の『後漢書』であったのに對して、具體的な史料を范書に提供した書物は『東觀漢記』であった」という趣旨の考察と並行して、「范曄が『東觀漢記』の記事をどのような觀點から取捨選擇しているのかという問題の追求」、換言すれば「范曄自身の價值觀や歴史觀をめぐる内面的考察」が試みられているからである。因みに著者の理解に従えば、一般には單に范曄が『東觀漢記』の記述の冗長さを嫌って大幅にそれを短縮した結果であると見做されている、下掲の「(1)・(2)」のような事實、すなわち、「(1)『東觀漢記』にその記録があるにもかかわらず、范書においてその傳記が削除されている人物には外戚とその關係者が多いという事實、(2) 皇帝の詔令や臣下の上奏文の多くが范書においては全文、または大幅に削除されているという事實、の背後にも、范曄の反權力

的性向が看取されることになるのであり、これは范曄の價值觀や歴史的觀の特色の理解に對して新機軸を提供する興味深い見解であると言うことができる。

『東觀漢記』の場合と同様、從來は專論に乏しかった范書とその志類、あるいは范曄自身に關する上記・六編の論考を一覽することができると本書を得たことは、評者を含む中國史學史の研究者にとつて大きな喜びである。特に、第三編の「范曄《後漢書》的志」以下、最後の「范曄《後漢書》與《東觀漢記》」にいたる四編の論文は以下の四點、すなわち、(1)范書の志類や紀傳例について、(2)范書と『東觀漢記』との關係について、(3)范書と華嶠の『後漢書』との關係について、(4)范曄自身の價值觀や歴史觀について、新見解を提出した業績であり、これらの諸論考を収めた本書が、今後、中國史學史研究者にとつて必讀の文獻となることは間違いないものと思われる。ただ、最初の二編、すなわち「關於范曄謀反問題的探討」と次の「范曄《後漢書》的撰修年代」に關しては、あくまで評者の個人的感想としてはあるが、前者については「謀叛を企てた范曄の心理(例えばその屈折した「ルサンチマン」など)はどのような歴史的背景の中で形成されたものなのか」という、著者の關心とは次元を異にした興味を、また、後者に對しては「范書の成立年代が元嘉元年であるか九年であるかという違いに如何なる意味があるのか」という疑問を感じたことも事實であり、この點を敢えて附言させて戴くことにしたいと思う。

七

それらが先秦時代に關する文獻であるために、「附錄」として本

編から區別するかたちで收録されたのが「從臨沂漢墓竹簡《吳問》看孫武的進步思想」と「顧棟高《春秋大事表》略論」という二編の論文である。このうち前者では、新出土史料である「吳問」にもとづいて、兵家の思想家として有名な孫武の社會思想や經濟思想の特色が論じられており、以下のような事實、すなわち、「孫武が、社會が奴隸制から封建制へ移行しつつあることを明確に認識したうえで、そのような狀況を前提として富國強兵政策の實現を目指していたこと、しかも、戦争が國家財政に大きな負擔を與えることも十分に認識していたこと」が明らかにされている。一方後者は、清の顧棟高（一六七九—一七五九）がその生涯をかけて完成した『春秋大事表』という大著に關する專論であり、その長所として、(1)所謂「三傳」のいずれをも偏重していないこと、(2)「春秋の筆法」や「微言大義」の思想から自由な立場にあること、(3)『春秋』の記事を、當時の歴史的狀況のなかで理解しようとしていること、(4)考證が精確であること、の四點を指摘した論文である。

八

以上、吳樹平氏の著書である『秦漢文獻研究』に收められた各論考の概要を紹介するとともに若干の論評を記してきたわけであるが、本書に關する書評を終えるに當たり、一種の論文集としての性格をも有する當該書の特種性を考慮して、最後に本書全體に對する評者の所感を述べておくことにしたい。

評者自身は書誌學や文獻學と、史學史との間には學問上、性格の相違が存在することを認めると同時に、前二者を以て、思想史の一分野である後者に對して基礎的事實を提供する役割を擔った研究分

野であると思ふ立場を採る者であるが、にもかかわらず、そのような評者が『秦漢文獻研究』と題された本書を讀了した現在、深い感銘を覺えているという事實の裡にこそ本書の眞價が示されているように思われる。すなわち本書は、その題名が示すような單なる文獻學的研究ではなく、史學史的、さらには思想史的洞察に滿ちた著作なのであって、本書の最大の特色もまさにその點に存すると考えられるのである。

註

- (1) 榎山明氏「批評・紹介 楊寬著『戰國史』（新版）」（『東洋史研究』第四十一卷第三號、一九八二年）。
- (2) 本書では司馬彪の『續漢書』の志類については扱われていないが、最近、福井重雅教授より、『續漢書』の志類に關しては以下のような專著が上梓されているとの御教示を賜ったので、以下に紹介させて戴くことにした。E.J. Mansvelt Beck, "The Treatises of Later Han", *Sinica Leidensia*, Vol. 21, 1990.

一九八八年十月 濟南 齊魯書社
五四四頁 五・五〇元